

コンバージョンされた演劇施設の研究

空間利用と今後の可能性について

5263 松本江美子

指導教員 助教 佐藤慎也

1章 序論

1-1. 研究背景と目的

欧米の建築の寿命は約 40 年といわれているのに対して、日本の建築の平均寿命は統計上 26~30 年である¹。日本では流行やライフスタイルが変動する度に『スクラップ&ビルド』が繰り返されてきた。

近年、歴史的建造物の保存に関する関心が高まる中、日本でもリノベーションやコンバージョンによる方法が一般にも知られるようになってきた。90 年代には実際の事例も国内で見られるようになり、演劇施設にコンバージョンされるものも表れはじめた。劇場は、特殊な設備を必要とする建築故に、コンバージョンは困難で、事例もあまり多くない。しかし、コンバージョンによって作られた劇場は、本来の姿を生かした独特な空間を作り出しており、個性的で魅力的な空間を作り出している。また、それに付随する要素としてコンバージョンによる稽古場もつくられている。広い空間の確保や騒音が問題となる中、演劇人は増える一方で稽古場不足が問題となっている。劇場に比べてコンバージョンしやすい上に利用率が高く、成功例も比較的多い。他には、多目的スペースとしてコンバージョンされたものの中で演劇施設としても利用されている施設もある。そこで、既に竣工されている事例を調査し、比較・検討することで、現状を把握し、今後のコンバージョンによる演劇施設の可能性を探る。

1-2. 既往研究

用途変更を扱った研究は、建築計画、都市計画、歴史、意匠計画等様々な分野で行われている。出口慎也の「建築物の用途変更における成立要件に関する基礎研究」²は、耐用年数の大きく残った一般的な建築物を対象に、用途変更前後の変化や特徴に着目し、用途変更成立に必要な要件を抽出して整理・分類したものである。法規の面から研究したものは、河野学らの「建築法規が廃校後の公立小学校の用途変更にあぼす影響について」³等がある。劇場への用途変更に関する研究には、真鍋太郎らの「ロンドンにおける劇場・ホールへの用途変更の傾向」⁴等がある。ロンドンにおいて頻繁に劇場・ホールへの用途変更による保存再生が行われていることと、今後も増加することをふまえて、実態を調査し今後の計画の基礎資料とするためにまとめられたものである。

他にも用途変更に関する研究や劇場・ホールに関する研究は数多く行われているが、国内の演劇施設に限定したコンバージョンに関する既往研究は見られない。

2章 研究概要

2-1. 調査対象の選定方法

調査対象は、国内の演劇施設へコンバージョンされたものの中で現在利用可能な施設である。文献、インターネットサイトより、以下のいずれかに該当する施設を調査対象として選んだ。

- 1) 演劇・ダンス等の公演を目的としてコンバージョンされた劇場。
 - 2) 稽古場使用を目的としてコンバージョンされた稽古場専用施設。
 - 3) 多目的スペースとしての使用を目的としてコンバージョンされた施設の中で、稽古場としての使用が許可されているもの。および、演劇・ダンス等の公演を行った事があると確認が取れたもの。なお、ここで定義する”演劇・ダンス等の公演“には、音楽発表会・コンサート・ライブ・上映会・人形劇・展示会・講演会・寄席等は含まない事とする。
- 以上の条件に当てはまり、研究対象として選出した 28 施設の概要が(表 1)である。

表 1. 調査対象施設リスト

用途	施設名	竣工年	改修年	元用途
劇場	ベニサンピット	不明	1985	工場
	赤レンガ倉庫	1913	2002	倉庫
	新名古屋ミュージカル劇場	不明	1999	ボーリング場
	精華小劇場	1926	2004	学校
	ウルトラマーケット	不明	不明	倉庫
	アートコンプレックス 1928	1928	1999	オフィス
	鳥の劇場	不明	2006	学校
稽古場	富山市民芸術創造センター	1930	1995	工場
	金沢市民芸術村	1919	2004	工場
	にしすがも創造舎	1926	2004	学校
	芸能花伝舎	1915	2005	学校
	急な坂スタジオ	1993	2007	結婚式場
	名古屋市演劇練習館	1937	1995	図書館
	クリエイティブセンター大阪	不明	不明	工場
	京都芸術センター	1869	1999	学校
	神戸旧居留地 高砂ビル	1949	1999	オフィス
多目的・イベントスペース	金森赤レンガ倉庫	1909	1988	倉庫
	アートスペース外輪船	1897	2005	倉庫
	中央埠頭 3 号倉庫	1954	2001	倉庫
	しらおい創造空間蔵	明治	2000	倉庫
	太郎吉蔵	1926	2004	倉庫
	創空間 富や蔵	1897	不明	倉庫
	大谷石地下採掘場	1943	1979	採掘場
	有鄰館	1843	不明	倉庫
	すみだパークスタジオ	不明	不明	倉庫
	緋工房ファブリカ	1965	不明	工場
	雲州堂	1870	2003	倉庫
博多百年蔵	明治初	2006	倉庫	

2-2. 調査方法

調査内容は主に「改修前後の用途」「既存建築の竣工年及び改修年」「施設の略歴とコンバージョンに至った経緯」について行い、これらは文献、インターネットサイト、及び各施設へのメールを用いたアンケートにより調査を行った。

更に許可を得る事のできた施設の見学と管理運営を行う団体の代表へのヒアリング調査を行い、「改修点」「コンバージョン後の利用状況」「今後の展望」について調べた。

3章 調査結果

3-1. 転用前転用後の用途

転用前の用途では「倉庫・蔵」が一番多い結果となった(図1)。「赤レンガ倉庫」のように大規模なものも見られるが、一つの蔵を多目的イベントスペースに改修している小規模の事例が多い。「工場」から転用されたものは、その広い面積を生かした大規模な施設が多く、さまざまな機能を併せ持っている事例が見られる。「学校」からの転用は、体育館を劇場に改修している事例が多く、教室は稽古場や倉庫として利用している。「ボウリング場」は、劇団四季の専用劇場となっている。

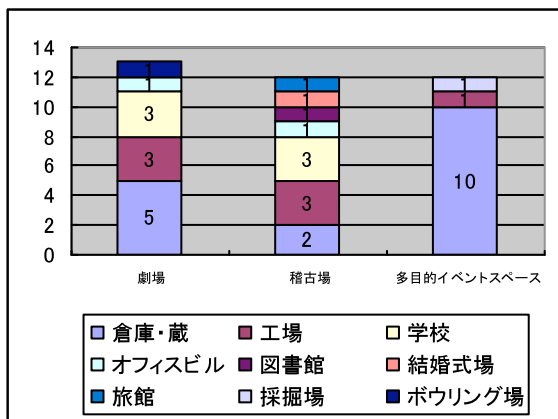


図1. 用途別転用前用途

3-2. 運営形態

施設の運営形態としては、「私営」が79%で「公営」の21%に比べて圧倒的に多い(図2)。「公営」の施設は全て、指定管理者制度による民営の施設である。用途別では、稽古場は公営の施設が多いが、劇場・多目的スペースは私営の施設が多い。

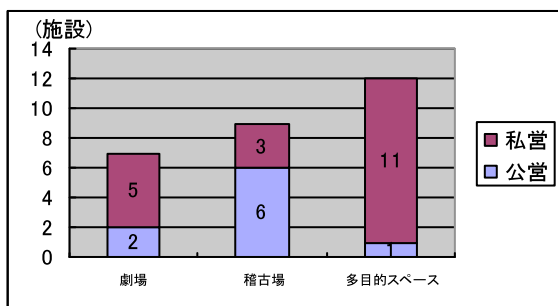


図2. 用途別運営形態の比

3-3. 文化財等指定の有無

景観保存関係や文化財等の登録の有無で施設を比較すると、「有」が9件、「無」が14件、「不明」が5件である。しかし、「不明」の中には「文化財等の指定無し」と推測できる施設が多い。文化財等登録のある9件はそれぞれ劇場が2件、稽古場が4件、多目的スペースが3件である。

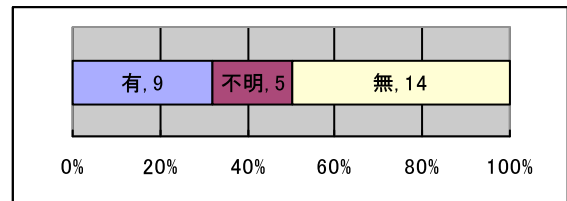


図3. 文化財等の登録の有無

3-4. 竣工年・改修年

改修前の建物の竣工年は、「大谷石地下採掘場跡」の1843年から「急な坂スタジオ」の1993年まで幅広い分布である。改修年が不明な事例が8件あり、うち2件は明治時代に建てられている。全体的には1950年以前の、古い建物がコンバージョンされている例が多い。

改修年は1995年以降に集中しており、それ以前の事例は3件しかない。一番古いものは、「大谷石地下採掘場跡」の1979年である。

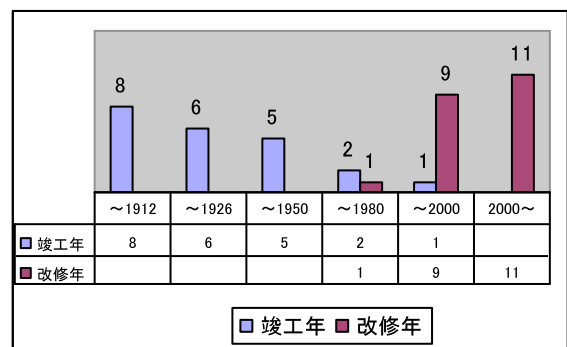


図4. 竣工年改修年の分布

3-5. 座席数

劇場として利用されたことのある施設の最大座席数をまとめた。100席未満の施設が28%、100~200席の施設が55%と、200席未満の小規模の施設が非常に多く、200人以上収容できるものは3施設しかなかった。最も大人数収容できるものは、990人収容の「新名古屋ミュージカル劇場」で、もっとも少人数のものは40人収容の「餅工房ファブリカ」である。

3-6. 稽古場の利用料金

各施設の稽古場の利用料金を比較した。練習室の大きさを、小(~50㎡)中(50~100㎡)大(100㎡~)に分類し、休日夕方(15:00~18:00)の1時間あたりの平均利用料金を、各施設付近の稽古場として利用できる公共施設の利用料金と比較した(図5)。結果

をみると、平均してコンバージョンによる施設の方が割安であった。

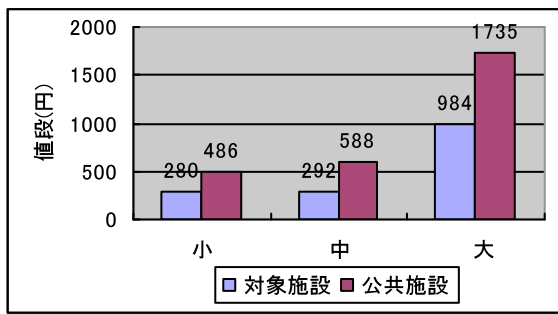


図 5. 稽古場の平均利用料金の比較

3-7. 文献調査まとめ

劇場は、学校や大規模な倉庫・工場等、広い空間が確保できる施設に限られている。座席数 200 席以下の施設がほとんどであったことからわかるように、コンバージョンによって大人数収容の劇場を造るのは難しい。

稽古場には、公営の施設が多く、所在地は関東・北陸・近畿地方に集中している。劇場・多目的スペースに比べると、空間さえ確保できれば元用途は問わない。文化財等登録のある施設の割合が比較的多く、稽古場は利用者が限られるので管理がしやすいためではないかと推測される。近隣の公共施設と比べても使用料金は安い。利用率は高く成功例は多い。

多目的スペースは、蔵・倉庫からのコンバージョンが圧倒的に多く、ほとんどが私営の施設である。2 件をのぞいて、いずれも 2000 年以降に改修された比較的新しい事例である。竣工年は「劇場」「稽古場」の事例と比べて幅広い。

3-8. ヒアリング調査

実態調査・ヒアリング調査の結果、以下のようなことがわかった。

コンバージョンに至った背景は、おおまかに「歴史的価値の保存」「空間の活用の一つとして」「地域の文化事業の活性化のため」の 3 つが主なものであった。

利用率は全体的に非常に高いといえる。劇場では、コンバージョンによって作り出された空間に魅力を感じて繰り返し利用するユーザーが多い。稽古場では、単に稽古場不足が響いているためと施設では捉えているようだ。多目的スペースも比較的利用率は高いものの、その利用目的はライブや演奏会等の音楽関係のイベントと、展示等に利用される場合が多く、演劇等の公演に利用されることはほとんどない。

「名古屋市演劇練習館」(図 6)のように改修に多くの予算を投じている例と、「急な坂スタジオ」(図 7)のようにほとんど手を加えていない例の差が明確である。躯体の老朽化が激しく、補強が必要な場合は予算が多くかかる。劇場に改修するには現行法規の基準を満たすために、避難計画やサイン計画・空調等、設備面での改修を行う必要がある。公演を行

うための音響・照明設備・バトン等の設置も必要となる(図 8)。稽古場の規制はそれほど厳しくないため、法規的にはほとんど改修する必要はない。多目的イベントスペースについても同様のことが言える(図 9)。しかし、騒音問題や快適さを追求するために手を加えている施設が多い。



図 6. 名古屋市演劇練習館



図 7. 急な坂スタジオ



図 8. アートコンプレックス 1928



図 9. 雲州堂

用途変更したことで発生する問題点としては、劇場に多く見られたのが「ホワイエの確保」「天井高の低さ」である。ホワイエに関しては屋外で待機するという形で対応している。また、これらの施設を使って公演を行う際には、天井高の関係上、その舞台にあわせた演出や美術計画が必要になる。「京都芸術センター」(図 10)の例では、床を半地下掘り下げる事で解決している。また、小規模の施設に多く見られたのが「騒音」である。「急な坂スタジオ」(図 11)のように遮音カーテンや吸音マットの設置により対応している例もあるが、それでも不十分な場合は利用時間を制限したり音量制限をかけたりにするしかないようだ。



図 10. 京都芸術センター



図 11. 急な坂スタジオ

今後の展開としては、公共の施設の回答では、今後このような施設が増えるのは難しいのではないかという意見が多かった。指定管理者制度によって管理・運営は限られた年数の暫定的な運用の場合が多いことと、地域住民に対して直接価値を見出すのが難しいため、近年では遊休施設等を活用する場合、ケアセンターや生涯学習等に利用される例が多いことが理由である。しかし、施設運営者には演劇経験者が多いこともあって、「増えて欲しいと思う」と希望する意見が多かった。

私営の施設では「わからない」という意見が多かった。独自で事業を運営していることが多いため、他の施設の実態を詳細に把握していないためである。

4章 結論

4-1. 考察

(1) 小学校からの転用

学校から演劇施設への転用は有効な手段であると考えられる。いくつかの教室と、体育館・講堂等の生徒が集会を行うことが可能な大空間を併せ持っているからである。体育館・講堂を劇場とし、その他の教室等を稽古場・作業場・倉庫に改修することが好ましい。

少子化によって廃校となってしまった学校は多く、活用方法の一つとして演劇施設へのコンバージョンが考えられる。学校は声やチャイム等の騒音を前提として建てられているため、多少の音漏れは気にしなくて良い。トイレや水道も十分な数が設置してあるので、公演等を行う際にも対応できる。

法規の面でも、有利に働く事が多い。学校は、他の施設に比べて採光規定や寸法等の規定が厳しいためである⁵。ただし、排煙設備や非常灯の設置等は免除されているため、これらの設備の設置をしなくてはならない。柱割りによる寸法の制約に関しては、学校は他の用途より規制が厳しいため妨げになることは考えにくい。道具を運び込む時や稽古や作業に既存の居室では小さすぎるという問題が発生した場合には、改修の妨げになる場合もある。

学校は地域に密着した施設であるため、地域から愛着や親しみを持たれている。よって、地域住民との交流はわかりやすいし、地域住民も施設に足を運びやすい。グラウンドや図書室等の自由に使える機能を残して、普段から市民が利用しやすいようにすることが出来ると良い。利用する市民と演劇関係者の間にコミュニケーションが生まれ、興味の無かった人も興味を持って公演を見に来るようになっていくのではないだろうか。

(2) 保存について

調査対象の中には、「歴史ある建築の保存」を目的としてコンバージョンしている例が多い。その中でも「横浜赤レンガ倉庫」や「富山市民芸術創造センター」は大幅に改装を施した例である。しかし、保存も目的の一つであるならばそれは矛盾することではないだろうか。日本では、外観保存の傾向が強くあり、内観の保存にはあまりこだわらないようだが、せつかくのコンバージョンなので内観も既存の姿を生かして保存してほしいと思うし、それがコンバージョンならではの魅力に繋がるのではないだろうかと思う。その点では、「雲州堂」や「太郎吉蔵」などの小規模の施設は、当時の姿を残し本来の魅力を引き出していると言える。

【謝辞】

アンケート、見学、ヒアリング調査にご協力頂きました各施設及び各団体の方々に感謝の意を表します。

【参考文献】

- 1) 日本建築学会編：建築設計資料集成【展示・芸能】、丸善、2003.9
- 2) リフォーム・リニューアル&コンバージョン展コンバージョン委員会編：建築コンバージョン事例集 100：テツアドー出版、2004.6
- 3) 日本建築学会編：日本の現代劇場 設計事例集、彰国社、1997.9
- 4) 建築思潮研究所編：用途変更—改修刷新・保存再生・コンバージョン、建築資料研究社、2004.10
- 5) 河野学、吉村英祐、横田隆司、飯田匡：建築関連法規が廃校後の公立小学校の用途変更にあらず影響について 京都市・大阪市・神戸市の場合、日本建築学会計画系論文集、第609号、2006.11
- 6) 出口慎也、高井宏之：建築物の用途変更における成立要件に関する基礎研究、日本建築学会東海支部研究報告集、第40号、2002.2
- 7) 真鍋太郎、山崎圭子、市川知義、勝又英明：ロンドンにおける劇場・ホールへの用途変更の傾向 建築物の劇場・ホールへの転用に関する調査研究：日本建築学会研究報告集Ⅱ、第72号、2002.2

¹資料)国土交通省

²参考文献 6)

³参考文献 5)

⁴参考部 7)

⁵参考文献 5)